

神楽と旅と 2010 年

葉山 靖明

(株) ケアプラネッツ デイサービスけやき通り

元患者であり、作業療法体験者であり、現介護事業者であり、そして作業療法士ではない私が作業科学の学会誌にエッセイを書きます。

「3つの私の体験」と「作業療法の歴史」を振り返りながら書いてゆければと考えています。

私が患者として作業療法を知ってから4年間、どうも腑に落ちなかった部分が最近見え始めたので、時代背景を振り返りながらこの稿を起こします。

老人ホームへの慰問の思い出

私は1965年に福岡県の豊前市という田舎に生まれ、兼業農家の二男として平凡に暮らしていた。私の故郷には角田八幡神社という小さな神社があり、秋になると村人が「神楽(かぐら)」を舞い奉納していた。鬼の面をつけ、舞い、和太鼓や神楽笛の音色が響く「神楽」は宮崎県の高千穂が有名であり、九州地方に多く残っている伝統芸能である。

1975年前後の私が小学生の頃の思い出を書く。

その頃、豊前市にも老人ホームがあり、そこに神楽保存会の大人と子供で「慰問」と称して出張神楽に出向いた。ちなみ「慰問」という言葉の意味は「(病気・災害などで苦しみ悩んでいる人を)訪ね慰めること」だそうだが、その頃の福祉事情からするとその言葉自体を責める訳にはいかない。話を先に進める。

ある年、慰問に出向き、私も衣装をつけて舞っていた。「舞の手順を間違えないように」と「お年寄りのために頑張ろう！」と一所懸命だった。

老人ホームの館内のホールの隅にパイプ椅子が並べられ約20名のお年寄りが見学していた。

演目の中盤、必死に神楽を舞っていた私の視界に「寂しそうな目をしたお年寄りの顔」が入ってきた。不思議だった。その隣のお年寄りも、その後のお年寄りの表情も。ほとんど全員の顔がその「寂しそうな目」をしていたのだ。

舞台では5人の舞方と3人の囃方が熱演しているのに……

「なぜ？」「懐かしくないの？」「ぼくたちの自己満

足だけ……？」

それは後々の私の記憶からは消えることはなかった。

それは今、考えると、慰問は「神楽を舞う人の作業」、であり、「お年寄りの作業」にはなっていなかった、若しくはお年寄りには意味ある作業でなかったということだと思う。

作業科学の中で「作業」について学んでいれば……

しかし、この話は1975年の頃のこと。

この頃は作業療法はアメリカにおいても還元主義パラダイム期といった状況だったと聞く。

「作業科学」はまだ影も形もない時代であったと私は認識している。

一人旅

時が過ぎ、1990年。葉山靖明25歳の夏。

一人旅が好きだった私は「一人でザックをかついで外国を旅したい」という一心で日本を飛び出した。南米大陸、ブラジル～イタリアまでの貨客船、ユーラシア大陸横断と10ヶ月を過ごした。

旅の理由？

その頃の日本はバブル経済が続き、株やお金が乱舞するような地に足の着かない心理が充満していた。

その頃付き合っていた女性(今では妻です)に「こんな国なんて、出て行こう！ブラジルに行って一緒に牧場をやろう！」と本気で彼女を説得し、大変困らせた記憶が残っている。

結局、1年間の一人旅という「折衷案」で話がまとまった。私は成田発ペルーリマ行き片道航空券と英語の辞書とUSドル紙幣を持って日本を出た。

その頃の心境は「地球上の自然と文化をこの目で見たい」「大陸を歩きたい」「モノや金ではなく経験によって俺は成長する」だったと記憶している。

その頃に「作業」という言葉を知っていて作業科学を学んでいれば「旅という作業は、俺を成長させるんだ！」そして「旅はレジャーではなく、生産的活動だ！」と説明していただろう。

ではその頃、作業療法の世界は？

1989年には南カリフォルニア大学において「作業科学」が正式に認められ、学部となり、博士課程を持つに至っており、翌1990年はCOPMがカナダで発表された。

余談だが、私は1990年9月、トランジット目的でトロント空港に約6時間いた。まさかその時にそこで作業療法のホリスティックなパラダイムが展開され始めていたとは私には知る由もなかった。

私の脳内出血

私が脳内出血を発症した年が2006年。

回復期病棟内のリハビリ OT 室で pasta を作るという作業療法を初めて体験し、その効果や手法、そして「作業療法士」に感動したのもその年だ。そして退院の後、自己流作業療法（これは作業だが）の陶芸、バンド演奏、旅、パソコン、そして、デイサービス開設・経営とどの作業も私の体を元気にしてくれた。今でも障害者手帳2級の右片麻痺後遺症は“維持期”であるのだが、作業療法のおかげで“維持”どころか、今までの人生で最も“活動”しており、それに比例するように私の QOL は向上していた。

この4年間の作業は私にとってすべて Meaningful な Occupation だった。

（インターネットで「葉山靖明」と検索して頂ければ多くの「作業」の原稿が確認できる）

2006年。

その年は「日本作業科学研究会」が設立された年。不思議なご縁に感謝したい。

研究会の設立のために労を重ねられた先生方のその信念と尽力に敬意と尊敬の念を抱く。

札幌から始まった「作業科学セミナー」は大阪において第10回目が開催された。また、2007年にはこの原稿が掲載されている「日本作業科学研究」(学会誌)が創刊、2009年には福岡市での作業科学セミナーにおいて私もギターを弾かせてもらった。

2010年から

そして、今は2010年。

Occupation (作業) の形態、機能、意味等を捉え、健康増進や医学的治療の媒体とすることについては作

業科学の理論として確立され、又は更に確立されようとしていると認識している。私自身は自分のデイサービスにおいて作業の Power を実感する多くの実践を行い、「作業」の機能、意味を目の当たりにしてきた。もし、現段階において臨床で実行できていなくても、すぐに可能化する。それは「患者が、そして客が求めているもの」だから広がるのは時間の問題こそあれ、全くもって当然だ。

最も私が伝えたいことをこれから書く。

この100年間。

作業療法の歴史の変遷はあるが、人体や社会的環境はどれほど変化があっただろうか。もちろん、人類は二度の大戦を経験したが、人間の本質は変わっていないと思う。

そして「作業」も本質は変わっていないと思う。私が体験した、慰問という作業やお年寄りの作業、旅という作業、片麻痺の作業、そして1917年にアメリカ作業療法推進全国協議会を発足させたことで有名なジョージ・E・バートン氏（片麻痺・肺結核）が感じ、広めた「作業療法」の作業も、本質は全く変わっていないと確信する。

その本質は変化せず、本質は既に、そして常に存在するからこそ、本質を探し深めることに人類の作業の意味がある。

「作業科学」という学問の存在する意味はそういったところにあるように私には思える。

人生を Occupy する Occupation (作業) の本質を深める「作業科学」は、地球上の人類としての偉大なる進化と私はそう思って止まない。

私は今後も、作業によって生きる力を蘇らせた患者として、作業の Power により独自性と差別化を図りながらマネジメントする経営者として、そして、自らが作業を行う人類の一人“葉山靖明”として、この作業科学を応援していくだろう。

完

2010・9・14

自宅にて